

私には名前があります (20170520～20170626)

大村伸一

私には名前があります。

それは、これまであなたが知っていたような紙書無書であるとか減多少増であるとかあるいは過渦泡道であるというような作り物めいた名前ではありません。そのような名前は必ず偽名であり、偽名で名付けられた者は初めから存在してはいないということです。もしも私もまたそのように名付けられた者であれば、私は今まさにこうであるような私ではないでしょう。それは確かなことです。私が私である以上、私の名前は偽名ではないのですから、私のその名前をあなたに知る機会があれば、知るやいなやその名前はまさにほかならないこの私の名前であると悟るでしょうし、一旦知ってしまったならば私がその名前以外の名前を持つことなど想像もできないと思い知るような名前です。勿論、悟ったり想像したり思い知ったりするのは、これを読んでいるあなたです。しかしながら、私の名前が他の誰の名前でもないのであれば、その当然の帰結として、私の名前を誰もそれが名前だとは気づかないことでしょう。そんな言葉の名前があるなどと思ってもよらないからです。だとすればそんな名前を知るや否や、その名前とは思えないことがまさに他ならない私の名前であるなどとは信じられるわけがありません。その名前を知ったからといって、知ったにもかかわらず私の名前はまだ知らないとしか思えないはずで、私の名前は、それを私の名前だと知ってすら私の名前だとすこしも気づかないような名前だということです。

私の名前は偽名ではありません。他でもないこの私が偽名で名付けられたような者であるわけがないからです。とはいえ、そもそも偽名で名付けられた者は、その偽名こそがはじめからその者の名前なので、それは偽名などではないと主張するでしょう。それがその者の固有の名前であると言うしかないでしょう。自分が偽名であるなどと信じられるわけがないからです。だとすれば、私の名前が偽名であっても私はそれには気づかないのでしょうか。私にとっては他ならない私の名前であるにも関わらず、私以外の者にとってはそれは名前ですらないというわけです。それは名前なのでしょうか。私にはとうてい名前とは思えません。私には名前があるのでしょうか。私にはとうてい名前があるととは思えません。

名前から始めたのは間違いだったのかもしれませんが、いや、明らかに間違いだったと言い切れるような間違いでした。私の名前など誰も知りたいとは思いませんしそれが偽名であればなおさらです。偽名でなくてもなおさらです。私はおそらくありふれたご挨拶から始めるべきだったのでしょう。見も知らぬあなたであれば、名前からではなく、私はまず初対面の挨拶から始めるべきでした。そして、初めてではないあなたには何か再会を賀ぐような挨拶をすべきだったと思います。以前どこかで、挨拶から始めたこともあったような気がします。そのとき、初めての方と幾度目かの方に同時にどう挨拶すべきか悩んだこともあったように思います。そのときはどうしたのでしょうか。はっきりとは思い出せません。あるいは、思い悩んだあげく挨拶などしなかったのかもしれませんが。だとすれば、私はここで初めて私の名前を披露し挨拶をしてもよいでしょう。このあとにあれこれ申し述べる事柄に挨拶は欠かせないことのように思うからです。勿論、始まりをやり直すことはできません。もうすでに始めてしまったことをないことにするなど不可能です。でも、あたかも別の始まりであるかのように続けることはできるのではないのでしょうか。それは名前から始めるよりもずっと賢いやりかただと思えます。

とはいえ、本当に挨拶が必要なかどうか、私にはすこし疑いがあります。つまり、私にあなたの名前を知ることができないにもかかわらず、あなたが私の名前を知っていてもよいのでしょうか。名前もしらない誰かに自分の名前を教えるなど、何か愚かしい行動ではないのかと思えるのです。それだけでなく、私の名前をあなたに知らせることは何か不合理な行動に思えます。つまり、私の名前は知られているのにあなたの名前は知りようがないなどと、そのような不公平があってよいものかどうかよく考えてみるべきだと思うのです。不公平と書きましたが不公平というよりもなにか理不尽というべき事態のようにも思います。それに、そもそもこれから申し述べる事柄に私の名前などなんの影響もないのですから、事の重要さを考えると、私の名前などお知らせしない方がよいのではないかとすら思えてきます。あなただけでなく、誰にも名前を知られてはならないのではないということです。名前を知られてはならないということです。

私には名前があります。でもそれは秘密です。